

茨城高等学校・中学校

校長室だより

2021年12月10日

世界はコミュニケーションでできている

十数年間、医学部進学を志望する生徒の面接指導や志望理由書の添削に携わってきました。医師を養成する医学部医学科の入学試験では、例外なく面接試験が行われます。医学部入試は入学試験であると同時に就職試験であると言われるように、大学は受験生を将来一緒に働く「仲間」としてふさわしいかどうかを見極めようとするからです。その面接試験の評価で大きな比重を占めるといわれるのが、受験生のコミュニケーション能力です。

受験生側でもコミュニケーション能力をアピールします。志望理由書には「私の長所は、誰とでも話すことのできるコミュニケーション能力です」「私は貴学の〇〇研修を通じて、医師として必要なコミュニケーション能力を養いたいと思います」などの文言が踊るのですが、実際に「それでは、あなたのいうコミュニケーション能力とは何？」と質問をぶつけてみると、明確な回答のできる生徒はきわめてまれです。

コミュニケーション教育の必要性が叫ばれて久しくなります。文部科学省は2010年に「コミュニケーション教育推進会議」を設置するなど、コミュニケーションに関するさまざまな教育施策を実行しています。新学習指導要領にも「主体的・対話的で深い学び」「協働」などコミュニケーションを前提とした文言が多く含まれています。

コミュニケーションに注目しているのは企業も同様です。日本経団連が発表した2018年度の「新卒採用に関するアンケート調査結果」では、企業が採用者選考にあたって重視した上位5項目は、コミュニケーション能力82.4%、主体性64.3%、チャレンジ精神48.9%、協調性47.0%、誠実性43.4%と、コミュニケーション能力が2位に20ポイント近い差を付けて1位となっています。また、コミュニケーション能力が1位となるのは16年連続ということです。

近年、これほどまでにコミュニケーションが注目されているのはなぜでしょうか。

大きな理由の一つに、産業構造の変化が考えられます。現在、日本の産業別就業者人口は、第一次産業（農林水産業）、第二次産業（製造業）以外の第三次産業が7割を超えています。第三次産業の中心は、商業・運輸通信業・金融業・公務など広範な職種を含む、いわゆるサービス業です。人と人との関わりの中で成立するサービス業では、豊かで柔軟なコミュニケーション能力が不可欠です。口下手で寡黙な職人はかっこいいけれど、口下手で寡黙なサービス業者は仕事にならないというわけです。

もう一つは、社会のグローバル化です。20世紀終わりごろから急速に進行したグローバルイズムは世界を一体化させ、金、モノ、人、情報が国境を越えて自由に行き来する社会

を生み出しました。異文化との共存、多文化社会への移行の中でコミュニケーション能力の必要性は急速に高まっていきます。言語力はもちろん、相手の持つ文化的背景や歴史をふまえた意思疎通、相互理解ができる能力が求められているのです。

このようにコミュニケーションの重要性が注目される一方、若者のコミュニケーション能力の低下を危惧する声も増えています。

たとえば、君は自分の気持ちを表現することが得意ですか？朝、寝坊して学校に遅刻しそうになって「やばい！」、お昼に食べた学食のカレーが絶品で「やばい！」、片思いの異性から突然話しかけられて「やば〜い♡」というような人はいないでしょうか？これでは自分の気持ちを正確に他人に伝えることはできません。コミュニケーションの土台となることばの力、なかでも語彙（ごい）力の低下傾向を指摘する専門家もいます。自分の思いを伝えるのが苦手なことを指す、「コミュ障」などという少し嫌な言葉も一般化しているようです。

若者のコミュ力低下の原因として、やり玉にあげられやすいのがスマホやSNSの存在です。今や40代以下のスマホ所持率は9割以上とされています。スマホの普及とともに利用者が増えているSNSですが、なかでもTwitterやInstagramなどは10代、20代の若者の利用率が高い（利用者の約7割）のが特徴です。SNSを通じてのコミュニケーションは、ごく親しい少数の人たちとの個人的で限定的なコミュニケーションと、不特定多数の他者を対象とした広範囲で匿名性の高いコミュニケーションとに二極化する傾向があるといわれています。限定的なコミュニケーションの中で言葉の意味は曖昧（あいまい）化し、情報過多の中では一つ一つの言葉の意味が希薄化して、結果として若者のコミュ力を低下させている、というのです。

また、スマホやSNSは過度の承認欲求をあおっているという指摘もあります。承認欲求とは「自分を肯定してほしい」「自分を価値ある存在として認めてほしい」という気持ちです。人間は誰しも大なり小なり承認欲求を持っており、そのこと自体は自然なことです。問題なのは、フォロワー数の増減や、自分の投稿に何人が「いいね」をつけたか、既読後すぐにメッセージの返信があったかなどに過敏になりすぎて、承認欲求が承認不安となっていくことです。承認不安が高じて片時もスマホを手放せなくなる「スマホ依存」の問題も生じています。承認不安は、コミュニケーションを求める思いがいびつにゆがんだ形といえるかもしれません。

一方で、若者のコミュニケーション能力は本当に低下しているのだろうか、と疑問をさしはさむ意見もあります。『わかりあえないことから／コミュニケーション能力とは何か』（講談社現代新書）の中で著者の平田オリザ氏は、さまざまな事例をあげながら若者のコミュニケーション能力は必ずしも低下しているとはいえない、と述べています。にもかかわらず若者のコミュ力が低下しているようにみえる理由の一つとして、若者の「コミュニケーションに対する意欲の低下」を平田氏は問題にしています。

少し長くなりますが、『わかりあえないことから』から文章を引用します。

「昨今、小学校の高学年、あるいは中学生になっても、単語でしか喋らない子どもが増えている。喋れないのではない。喋らないのだ。／そもそも子どもは、幼児期には単語でしか喋らない。それが成長するにつれて、他者と出会い、単語だけでは通じないという経験を繰り返し、「文」というものを手に入れていく。この言語習得の過程が崩れているのではないかという危惧がある。／たとえば、兄弟が多ければ、「ケーキ！」とだけ言ったところで、無視されるのが関の山だろう。しかしいまは少子化で、優しいお母さんなら、子どもが「ケーキ」と言えば、すぐにケーキを出してしまう。あるいは、もっと優しいお母さんなら子どもの気持ちを察して、「ケーキ」と言う前にケーキを出してしまうかもしれない。／子どもに限らず、言語は、「言わなくても済むことは、言わないように言わないように変化する」という法則を持っている。「ケーキ」をどうしたいのかを聞かずにケーキを出してしまっているのは、子どもが単語でしか喋らなくなってもしかたない。／繰り返すが、単語でしか喋れないのではない。必要がないから喋らないのだ。「喋れない」のなら能力の低下だが、「喋らない」のは意欲の低下の問題だ。」

平田氏はさらに、言語教育でスピーチやディベートなどの「伝える技術」を子どもたちに教え込もうとしたところで、「伝えたい」という気持ちが子どもの側になかったら、その技術は定着しない、そして「伝えたい」という気持ちは「伝わらない」という経験からのみ生まれるのだ、と著書の中で述べています。

コミュニケーションとは何かを考えると、この「伝えたい」という気持ちに重要なヒントがあるように思えます。「伝える」という行為は、他者の存在を前提とします。コミュニケーションの基本は、他者を認識し、他者をつながろうとする意志にあるといえるでしょう。また、「伝える」ことの目的は、自分の考えや思いを他者に理解してもらうことです。しかし自分の思いは、常に他者からの理解を得るとは限りません。平田氏の言うように、「伝えたい」という気持ちがありながら「伝わらない」ときに、はじめて「伝えるためにはどうしたらいいのか」というコミュニケーションの問題が顕在化してくるのです。

さらに言えば、コミュニケーションとは一方的に「伝える」能力をいうものではありません。もしそうなら、飲食店やコンビニの店員に難癖をつけるクレーマーや、ピストルを突きつけて「金を出せ！」と要求する銀行強盗はコミュ力抜群と言わなければなりません。

ドイツの児童文学者ミヒャエル・エンデの生んだ名作『モモ』の主人公、小さな女の子のモモは特別な才能を持っています。それは相手の話を聞く才能です。相談事のある人がモモに話を聞いてもらおうと、きゅうによい考えがうかんできます。モモは何かをアドバイスしたり、質問したりするわけではありません。大きな黒い目で相手をじっと見つめながら話を聞いているだけです。それだけで、どうしたらよいか思い迷っていた人は、急にはっきりとした自分の意志にいたることができるのです。

モモのこの才能は、コミュニケーションに必要なもう一つのことを示唆（しさ）しています。それは、他人を「受け止める」能力です。モモが話を聞いた相手が、よい考えを思いつくことができたのはなぜか。それは、モモが相手の思いを受け止めたからです。もう少し丁寧に言うと、「私はあなたという存在を認めています」「あなたの思いを理解しよ

うとしています」というメッセージを伝えながら、話を聞くことができたからです。この他者をひたすら受け止めるという姿勢は、カウンセラーがカウンセリングを行う際の基本であるという話を聞いたことがあります。

コミュニケーションが自他双方向にはたらくものである以上、そこには「伝える」意欲と「受け止める」意欲の両方が必要になるのです。

このように考えていくと、コミュニケーションとは、他者とのつながりを求め、他者を理解し、かつ他者からも理解されることを求める行為であると定義づけることができるでしょうか。

人間は社会的動物であるといわれています。好むと好まざるとに関わらず、「オギャア！」と産声をあげてこの世に登場した時から、国家、民族、地域、家族などさまざまな社会の中に組み込まれて生きていくことを運命づけられています。社会という他者の集合体の中で生きていくうえで、コミュニケーションは必須のスキルです。世界はコミュニケーションでできている、といっても過言ではないでしょう。

コミュニケーション上の齟齬（そご）が大きな悲劇につながった例もあります。

『歴史をかえた誤訳』鳥飼玖美子著（新潮文庫）には、ポツダム宣言をめぐる日本の対応に関するエピソードが紹介されています。太平洋戦争末期、連合国側から日本に無条件降伏を要求するポツダム宣言が発せられます。その頃、日本では国民総動員体制のもと激戦が行われており、弱気な発言をすることは不可能でした。回答にあたって当時の内閣は、最終決断を先延ばしする意図をもって、内容は「静観する」という意味で、ただし弱気に見られないために「黙殺する」という表現をとることを決定します。

この「黙殺する」という日本語は、連合国側に「ignore（無視する）」あるいは「reject（拒否する）」と訳されて伝わります。そして、回答から十日も経たない8月6日、広島に原子爆弾が投下されるのです。

平田氏は「コミュニケーションに正解はない」と述べています。どんなに思いを込めて伝えようとも、どんなに真摯（しんし）な思いで受け止めようとも、伝わらないこと、理解できないことはあって当然です。恋人同士が同じ月を見上げて「今夜は月がきれいだね」「そうね、とてもきれいな月ね」とささやきあったとき、二人の「きれい」は同じ意味ではないかもしれないということです。

しかし、「だからコミュニケーションには意味がない」ということにはなりません。繰り返しになりますが、人間が社会の中でしか生きられない以上、伝わらなくても、受け止めることができなくても、私たちはコミュニケーションをあきらめるわけにはいかないのです。

「個」である私たちの周りには、広大な海のように「他者」が広がっています。世界は他者の集合体です。大切なのは、世界に対して自分を閉ざさない、ということです。自分を開いておくことには勇気がいります。世界から吹き寄せる風や波に痛みを感じることもあるかもしれませんが、それでも、私たちにはコミュニケーションが必要です。

生物学上は「ヒト」として分類される人間は、個別のパーソナリティや価値観を持った

存在として自分の人生を生きる時に「人」となります。思いを伝えようとする、相手を理解しようとする、ヒトは人となり、世界との絆を手にするのです。

おまけ

さて、ここで唐突ですが、茨高生、茨中生のコミュニケーション能力の向上のために「コミュ力向上委員会」の立ち上げを發議したいと思います。反対の人は手をあげてください。……いませぬね（笑）

それでは、筆者の独断によるコミュ力向上のための提案をしていきます。

その1：大きな声であいさつをしよう。

「な～んだ、そんなことか」と言うなかれ。あいさつはコミュニケーションの大事な第一歩です。古代において、あいさつは自分が敵意を抱いていないことを相手に示す手段だったともいわれています。私はあなたをきちんと認識していますよ、あなたを否定せずにコミュニケーションする意図がありますよ、というメッセージを伝え、相手との垣根を取り払うのがあいさつの役割です。

伝えるためには声の大きさも必要です。人前に出ると声が小さくなってしまふ人は、まずあいさつで大きな声を出す練習をしてみましょう。

その2：文章で話すことを意識しよう。

友人との雑談では問題なくコミュニケーションできるのだけれど、大勢の前で発表したり、正式な場で意見を述べたりするのは苦手、という人はいませんか。気心の知れた仲間同士では「マジで?」「マジマジ!」「あーねー」で通じる話も、第三者に伝えるには文脈化する必要があります。そのためには自分と異なる価値観やバックグラウンドを持つ相手と会話する機会をもち「きちんと話す」経験を積むことが大切です。自分の親だと間柄が近すぎて「マジマジ」で通じてしまうかもしれないので、学校の先生や親戚のおじさん、おばさん、友達の親などといった一定の距離のある大人と積極的に会話をしてみることを勧めます。ただし、身元のはっきりしない大人との会話は安全面の問題があるので原則として控えること。

読書も効果的です。それも読むのに少し苦勞する「やや堅め」の本がお勧めです。読書は本とのコミュニケーションです。読書をするためには文脈理解が欠かせません。読書は、他者の考えを文脈化してインプットし、同時に自分の考えを文脈化してアウトプットするスキルを伸ばしてくれます。

その3：社会の動きに関心を持ち、新聞やニュースに目を向けよう。

それがどうしてコミュニケーションと関係するの?と思う人もいるかもしれませんが。コミュニケーションが他者を指向する以上、コミュニケーションが成立するためには他者や社会への興味関心があることが必須条件となります。興味関心が育てば、自分の考えや意見が生まれ、それを他人にも伝えたいという意欲につながるはずです。

大学受験で課される小論文や面接は、受験生と大学の間で取り交わされるコミュニケーションといえます。小論文の指導をしていて一番困るのは「小論文で、何を書けばいいんですかあ？」という質問です。その人の中に、書きたい、伝えたいという思いがなければ、どんなに技術を教えてもよい小論文は書けません。「どのように書くか」は教えられますが、「何を書くか」は教えられないのです。

以上、まったくの私見ですが、三つほど提案させてもらいました。

コミュ力向上委員会の設置目的は、コミュニケーションの達人になることではありません。社会生活に必要な最低限のコミュニケーションスキルを身につけることです。ほんのちょっとした心がけでコミュニケーションは変わります。身構えずに、できることから始めてみてください。